「羽附峠（はつけ）」

中の湯、山崎百合子氏に捧ぐ

誠吉はいつものように五時過ぎに起き出して朝飯前の仕事をした。田んぼの畔の草をエンジンつきの刈払い機でなぎ倒す作業だ。地面を舐めるように刈るのだが、神経は毎分何千回も回転する鋼鉄の刃先に集中するので七十なかば過ぎた身には相当きつい仕事だった。回転の風圧で稲が弱々しく葉先をくねらせた。五月に田植えした苗はとうに活着して次の成長へのステップに入っていい筈なのに、田面全体の稲がふわふわとして根が大地に付いていないように見えた。

小一時間ほどの仕事を終えて、帰りがけに野菜畑に立ち寄るのが日課なのだが、その畑にも田んぼによく似た事態が現れていた。妻が丹精こめて植え付けたナス、キュウリ、ピーマンなどの苗は植えられたまんまの姿勢で成長のきざしは少しもみられなかった。「おかしな年だ」と誠吉は口の中でつぶやいた。

自宅の目の前に東山がのぞかれる。直線にすると七・八キロの距離に位置するのだが、九〇〇メートルほどの高さをもつその山は、季節や朝夕の時間により表情を変化させ、山容は時に高く時に低く錯覚させる。その山では、一昔前まで良質の御影石が採れて業者は必要な部分だけ運び去った。切取った石屑は捨てられガレ場となった。晴れた日には、西に沈む太

陽に積み上げられた花崗岩が反射してキラキラと輝いていたこともあった。誠吉は自宅の庭に盆栽を飾る趣味も無く、経済的な余裕もなかったので、自慢すべきものを持たなかったが、ただ一つ自宅から眺める東山だけは違っていた。いわゆる借景である。訪ねてきた誰彼にも山の説明になると多弁になった。採石業者が去って二十年がたち、山頂に緑が復活したのだ。

誠吉の家は代々の百姓で、何代続いたかと聞かれても彼は正確には答えられない。祖父にあたる人が婿養子で、その先代の頃に初めて苗字が与えられたと言うから、人様に語るような家柄ではないことは事実だし、彼はそうしたせんさくに興味はなかった。今家族は八人ということになっているが、息子夫婦と孫達は同じ敷地内に建てた住宅に住み、誠吉夫婦は昔ながらの母屋で暮らしている。

老後の暮らし、それは予想以上に忙しいものになった。家の周りの掃き掃除、野菜の手入れ、学校の送迎と目いっぱい動き回っても足りないほどだった。しかしそれは村の人々から言わせると「とっても幸せな事でねーの」「五十近くなってもまだ嫁がなく、せっかく嫁をもらっても二人で町に出てしまい」はたまた「嫁が嫁ぎ先を嫌って出てしまった」り「昔のように孫をからめて世話をするなんていう家族は村にはなくなってしまったのよ」とうらやましがられ、そういうものかと思いなおし、老後とは平穏で平凡な変わりない日常なのだとあらためて気付いた今日この頃であった。

軟弱な稲、何日たってもすっくとしない野菜、家の前の坂道から見た東山の中腹から上は

何日も姿を隠していた。あることが誠吉の脳裏を小さくかすめていた。

この冬はいままでになく雪が少なかった。湧き水と天水にたよっているこの地域の稲作が心配されたが、貪欲に雨水を吸い込んだ森林が浄化した水を適度に吐き出してくれ、なんとか水不足をまぬがれた。「おかしな年だな」ということを感じたのは動物の直感みたいなものだ。とくに東山にかかり何日も動かない冷気を帯びた雲が気がかりだった。

誠吉が自宅に戻ると食事の支度がしてあった。息子夫婦は早々と仕事場に出かけ、孫達は幼稚園、小学校に行き、みんなを送り出した妻は実家で一人暮しをしている病気の母親の世話にいったらしい。二時間近く動いても汗はかかなかったので身体を拭くこともなく、炬燵に足をつっこみスイッチを入れた。誰も居ない家は静かだった。誠吉はテレビを見ながらゆっくりと食事を続けた。最後に味噌汁を飲み終えると立ち上がり、めし茶碗にポットの湯を注ぎ、血圧の薬を飲んだ。何年来変わらない誠吉の生活パターンであった。次に足を入れたまま横になりテレビの音を聞くともなしに聞く。六月の半ば、まわりの林はすっかり緑に覆われ、間もなく初夏と呼ばれる季節が近いのに、炬燵に入った足の感触は妙に心地よかった。

誠吉の脳裏で去来する気になるもの、小さく突きささった刺のようなものを、考えるともなくぼんやりと追っていた。

それからいくばくも過ぎないとき、かけっぱなしのテレビ画面の上部にテロップが流れ始めた。「浜通りの原発に事故発生」の文字が踊るように何遍も流れ、次いで通常の番組が切

り替わり、ざわめく放送室が映し出され、メモをもったキャスターが早口にしゃべり始めた。「川島原発四号機で事故が発生しました。詳細はまだ報告されておりませんが、原発周辺地域の住民の皆様は、これからのラヂオ・テレビの放送に重大な関心を持って行動してください」

誠吉はすっくと立ち上がった。受話器をとり息子のところに電話を入れた。「原発で事故発生だ、嫁さんと連絡をとっておけ、こっちはばあちゃんは出かけているが、あのトレーラーを引き出す。お前達は家まで戻る時間はない。小学校によって二人を連れていく。幼稚園にもまわってまー君達も乗せて行く。あとは町で合流してからだ。ばあちゃんは大ばあちゃんの所に行っているが後で車で追いかけてもらう」とそれだけ伝えると、奥の座敷から大きなダンボールを居間に運んで、とりあえず貴重品と思われるものを手当たり次第投げ込んだ。ボリュームを上げておいたテレビがまだがなりたてていた。最初のテロップ、息子への電話、ダンボールの準備まで五分が経っていた。誠吉は時計を見たとき、貴重品探しは止めようと決め、軽トラックを玄関先に着けて妻と自分の衣類をかき集めて投げ込み、次に息子の家に行き、六人分のありとあらゆる衣類を二回にわたってトラックの荷台に投げ込んだ。ここまでが一番大変だった。トラックを発進させて倉庫兼車庫に行こうとしたが、車を止め縁側にあったブルーシートを二枚衣類の上にかぶせた。倉庫の引き戸を開けて車をバックさせ、後部の引き手の口を引いた。牽引車を接続させようとした時、手袋をしていないことに気がつ

いた。走って玄関に行き、分厚いゴムの手袋を拾い「落ち着け落ち着け」と言いながらナンセンスな自分の姿を想像していた。倉庫に保管してあるトレーラーには、こんな日もあろうと予想して、大量の荷が積み込んであった。雨具長靴、テント、毛布、携帯用コンロ、炭、カンテラ、玄米と味噌・醤油、缶詰類、鉈のこぎり、スコップ、飲料水用小型タンクなどなどである。野営の原点は必要最低限の装備と食料であっていいわけだが、最近は新しいものがぞくぞく登場してきて結局荷物は多くなってしまった事情があった。トレーラーを引っ張って家を出たのは九時を少しまわっていた。用足しのため何処かまわっているらしい妻には連絡がつかなかった。出先でこの重大事故を知ったとしたらすぐ戻ってくるはずだが、原発に対する国や電力の対応を鋭く批判している妻も、いざ荷物を積んで逃げ出すという誠吉の考えには乗ってこなかった経緯がある。さきほど電話した息子も、電話のむこうでは気が乗らない口調だということが誠吉に伝わってきた。

中古で買った軽トラは重量のあるトレーラーを引いて県道を走り始めたが、沿道に人影は少なかった。たまに知人に会っても声をかける余裕などなかった。小学校につくと先生方が玄関に立って話をしていた。「子供を迎えにきました」と言うと、そのうちの一人がもののしい格好にびっくりしたように体育館の方に走り去った。校長先生が心配そうに「いま教育委員会から連絡がありまして、安全な屋内に待機するようにということなので、とりあえず……。」と息を止めてから「どうなるのでしょうね」と小声で誠吉をのぞき込んだ。先ほどの職員が二人の孫を連れて戻ってきた。助手席に重なるように二人を乗せると窓越しに校長先生に別れのあいさつをした。「非常に危険だと思って逃げ出します。土湯トンネルを越えて山の向こうまで逃げてみます」と。

東山の南に位置するのが「富士の見える北限の山」といわれる天高山である。標高一〇五〇メートルは東山よりは少し高く兄貴分と言っていいだろう。二つの山塊は仲良く南北に並んで立っている。その山裾の交じり合うところが中通りと浜通りの郡境となっている。ここから西に流れる水はいく筋もの川となって阿武隈川にそそぐ。東に流れる水は太平洋にそそぐ。いわばここは分水嶺になっているが、実際この地に立ってみると阿武隈山塊には珍しく、広々とした耕地が拓け、西と東に別れて流れ始める小川は、行きつく先の阿武隈川の激流や太平洋の荒波を感じさせないやさしい流れなのだ。

ひとびとはこの地を「羽附峠」と呼んでいる。

羽附峠は海からの塩の道としては著名ではない。峠を越えるとしばらくゆるやかなくだりが続き、急に峻厳な谷沿いのけもの道に出くわす。塩を積んだ馬が容易に通れる道ではなかったはずだ。県南からいわきに通じて発達した塩や魚介類の流通、または相馬から二本松に通じた塩の道に類するような宿場町の形跡らしきものは見られない。

スピードの出せない車のハンドルを握りながら、誠吉の頭の中は冷静さから地団駄をふむような、叫びたいような怒りに変化していた。絶対安全と言われてきた原子力発電施設で起

きた事故。事故原因も事故の詳細も全然明らかにはなっていない。逃げ回っているのは俺だけだ。学校も町も防災無線も沈黙を守っているだけ。「隣り町の事故？まさかここまで来るはずはないさ」とみんな高をくくっているのが読み取れる。

しかし考えてみるがいい。事故隠しとデータ捏造、隠蔽と謝罪記者会見。何遍繰り返されたか知れない。そして人々はおそろしい事態に鈍感になり、声を上げなくなった。むしろ最近目だったのは、大きな声を上げ、原発増設推進を掲げるある自治体が現れたことだ。手を後ろに組んで大口を開けているだけで国や電力から交付金や財政援助が流れ込み、贅沢な箱ものがこれでもかこれでもかと言わんばかりに姿を現す。欲望とは尽きないもので、その果てに待っていたものは何だったのか。

「おじいちゃん何処に行くの」五年生の孫の啓助が口を開いた。普段兄弟で車に乗るとはしゃぎまわるのだが、むっつり考え事をしている誠吉に声をかけるきっかけがみつからなかったのだろう。

「波江の原子力発電を見学したことあっぺ？」

「うん」

「事故が起きたらしい、学校では何といっていた？」

「ん、みんな急いで体育館に集まれって。腰を下ろして静かに待つようにいわれたけんどみんなドッヂボールやマット遊びをやっている」

妹のナツミが初めて口を開いた。

「ママたちは？」

「お父さんもママも町で待っている、マー君たちは幼稚園にまわって連れていく、おばあちゃんはあとで車で来る」

「マー君たちはどこに乗るの」

トラックの運転席は二人きり乗れないのを心配しているらしい。先ほどから妻からの連絡がないのが気にかかっていたので、ナツミの問いには答えなかった。

曲がりくねった県道をトレーラーは時速二〇キロほどで走った。目的地は土湯トンネルをぬけた会津方面なのだ。乗用車で飛ばせば一時間ほどの距離であるが。この車でもう二人の孫を拾い、町で息子に会っていくとすれば、安全区域と考えていた安達太良山麓に着くまでに一時間はみなくてはいけない。

十五分ほどで幼稚園に着いた。城下町として整備された町の道路は鋭角に曲がり、トレーラーを牽引した車は園の駐車場に入れなかったので、誠吉は急な石段を上がるしかなかった。二〇年前、彼は脳梗塞をやり後遺症が残った。リハビリで車の運転は出来るようになったが。階段の駆け上がりや自転車こぎは不可能だった。幼児達のガヤガヤした音の方向をめざして進み入口を開けると、二人の孫はすぐ飛びついてきた。「おじいちゃんどうしたの？」「おとうさんのところに行くのさ、迎えにきたんだ、さあトラックに乗って静かにしているんだぞ」

二人を連れて石段を下りると大きい方の兄弟は不安そうな顔をして待っていた。この二人を荷台に乗せるしかないな、シートをかぶせて首だけ出していければ大丈夫だろうと思案していると携帯が鳴った。息子からだった。

「いまどこにいるの」

「マー君たちを受け取った、あと十五分でつく。ばあちゃんから連絡はなかったかい」

「いまあったばかりだ、大おばあちゃんをどうすっか、ひとりで置いておくわけもいかず、本人はそんなとこにいかなくていい、ここで死んでもいいと言い張って聞かないらしい」

「事故の新しい情報は入ったか」

「混乱している、メディアも現場に入れず、ヘリコプターと海上からの望遠での映像が流れているがチカチカと不鮮明で駄目だ」

二人を荷台に寝かせるように乗せてシートをかぶせシートが風で飛ばないようにその上に重そうな衣類を重ねた。妻はまだ実家に居るのだろうか。九十歳を越えて足腰の立たない頑固な母親のそばで、なだめすかしている妻の語気が聞こえるような気がした。

そもそもこのトレーラーの逃避行は妻と二人で考えたものだった。平成十一年、合唱クラブで童謡の作曲家野口雨情記念館を北茨城市に訪ねた事があった。海の家で魚を食べたり、波と一緒に唱歌を歌ったりしているすぐ近くでとんでもない事が起こっていたのだ。東海村での臨界事故である。誠吉達が浮かれてさまよっていた場所から、さほど遠くない所であっ

たらしいことは自宅に帰ってからのニュースで知った。作業員が非常に危険な物質の運搬をバケツでやったというミスだった。

このとき誠吉は真剣に妻と討論した。家族の住むこの地域はいったい安全なのか。浜の原発で大きな事故が起こった場合どうすればいいのか。とりあえずいかに早く危険な場所から離れるかだ。中古のトレーラーを見つけると買って来た。昔のキャンプの経験を思い出しながら、家族が一週間キャンプしながら生きられる食料と衣服・炊飯道具などを積んでみたが、あれから何遍も中身を交換したり加えたりした。

これから向かう目的地に、誠吉は目算があった。トンネルを越すと気候がまったく異なるということだった。この周辺には湯量の豊富な温泉が少なからずあり、そのうちの一軒が何年らい懇意にしている自炊専門の湯宿で、きっぷのいい女将に冗談ごかしではあったが頼んだことがあった。「こんな恐ろしい事は考えたくもないが、もしもわしの村まで放射能の毒がとんでくるようなことがあればここに逃げてきます。ひと部屋貸してもらえますか」と。

息子達との待ち合わせのショッピングセンターについたのは十時をまわっていた。彼はまだ来ていなかったので子供達を下ろし、冷たいものを買いに走らせた。事情を知らないチビ助どもはキャアキャア叫びながら店に飛込んで行った。子供達がアイスをかかえて戻って来たとき丁度息子も乗りつけた。

「どうする?」

「ふたりのばあちゃんが問題だな」
「ここまでくれば家に居るよりは安全と思うが」
「現地では避難勧告などは出てないのかなあ」「なに言ってるの、原発四号機のある松葉町なんかパニック状態らしいし四五九号に乗ってどんどんこちらに登ってくるらしいから」「危険だな、死の灰に追いかけられて来るようなものだ」。
妻はケータイを持っていなかった。視力が弱いといってかたくなに携帯電話を持つことに拒否反応をおこしていた。誠吉も息子の健作も口には出さなかったが、こんな状況になってみると本当に困ってしまった。
「たばこを一本くれや」
息子からたばこをもらって火をつけた。今年になってからの天候不順のこと、いつかあるかも知れないが、あってはならない事故。この二つが同時に起きたときの悲劇は通常予測される何倍もの威力でもって人や自然を破壊するだろう。と思った。それはヒロシマや長崎のような瞬間的な巨大爆発でなく、チェルノブイリのように人為的なミスから起こって炉心が溶解するまでにいたり、飛散した死の灰が風によって運ばれるという図式だ。
天高山と東山の周辺に点在する村々。高地の村に十年に一度ほどの周期でやってくる悪魔がいる。餓死年、飢饉、冷害という違った言葉で呼ばれているが、中身は同じだ。悪魔は三陸の沖や相馬の沖合いから霧と一緒に冷たい風を内陸に運んでくる。

ヤマセと呼ばれる自然現象が現れるその年は、正月を過ぎた頃から気候の異変を知らせる何らかのシグナルが人や動物や鳥達に伝えられる。降雪が極端に少なかった、ウソの大群が押し寄せ桜の花芽を根こそぎ食べ尽くした、野菜が根付かないなどである。
ヤマセが来る前兆は現代人には分らないと思う。事実、誠吉と息子の健作を比較してみると、健作は秋の収穫に大型コンバインを入れたくて田んぼの水抜きに力を入れ、誠吉は冷害の危険を察知し、足しげく田んぼに通い水を満杯に補充する。その差だ。誠吉は前回の餓死年に近在の村々を回ってみたことがある。すだちの稲が刈り取られないで放置されていたり、脱穀をあきらめ大半は土手に重ねられているのを目にして心を痛めた記憶がある。
汗をかきかき妻が現れた。母親は乗っていなかった。
「どうしたの」と聞くと、皆に迷惑がかかるからいつもの病院に連れて行ってときかなかったということだった。
「手続きに時間がかかったのよ。ずーっと診てもらっている寺岡先生に頼み、急にめまいに襲われたということで二・三日入院させてもらう事にしたの。でも病院に長くは置けないから小島の妹にも来て見てもらうよう電話で頼んだわ」
「今朝のテレビを見ただけで、トラックのラジオは壊れているし、情報が分らないんだ」と妻の車に近づいてラジオのボリュウムを上げてみた。スタジオの混乱は続いているようだ。その放送で放射能漏れの警戒区域の広がりを伝える女性アナウンサーの声が流れ、自分達の

説明するのか。人命にかかわる不条理に誰も答えようとしないではないか。答える事ができないではないか。

一行は車を連ねて山の温泉地へ向かって走り出した。妻が合流したことで誠吉の気持ちはずっと落ち着いてきた。カーブを曲がるたびに阿武隈の山並みが見え、羽附峠のあるくぼ地にはうっすらと雲がかかっていた。放射能を含んだ雲と言っても誰も気づかないだろう。山の湯宿の女将には妻が説明し交渉してくれるだろうが、長逗留は期待できない事は覚悟しておかなくてはならない。宿の所有地にブナの原生林がある。とりあえずあの樹の下を借り熊笹を刈り払ってシートを敷けば何とかなるだろう。誠吉の持ち山にも数本のブナがあり雨が降ると雨水は葉から枝先へ、枝先から中心の幹へと一滴の無駄も無く流れ、腐葉土をくぐって地中にもぐりこむ。少しの雨でも心配無い事を経験から知っているのだ。近くに水が流れていることもありがたいのである。

山岳道路に入ると軽トラはエンジン音をひびかせて重いトレーラーを引っ張った。息子が調節してくれたアンテナのおかげでラジオを聞く事が出来た。四号原発の周辺について一般の人々の避難は完了したようだが、建て屋への立ち入りは危険で不可能と繰り返し報道を流すのみである。放射能の海への流失も観測され、内陸部への飛散もその範囲がじわじわと広がっているようだ。各自治体から報告される風速風向によって計算されるのだろうか。報道の内容から判断すると、事故発生時の対策マニュアルはほぼ完全に近く作ってあるに違いな

いが、机上のマニュアルの作成とパニック時の行動とは必ずしも合致しないと考えるのが当たっていると言ってよかろう。道路横の展望広場に乗り入れて妻の車を誘導した。

「小休止だ」

妻と子供達もぞろぞろと降りてきた。

「ほらあの辺りが東山だぞ」

誠吉が指さすほうを一生懸命見つめていたが、遠い遠い阿武隈の山々は低い雲の下に同じように寝そべっていて、どれがなに山なのか誠吉のほか判別がつかなかった。ただ目の錯覚からか誠吉達が高度をどんどん上げていくと、向うの大地もそれを追うように高度を上げてくる。この広場からみると羽附峠の右側に屹立する天高山の山頂はこの展望広場と同じ高さに見えるからここは標高千メートルの地点なのだ。

「ここは高さが千メートルのところだよ、さっき温泉がいっぱいあったところは七百メートル、もう少し登って千二百メートルまで行ったら道の駅があるから昼飯だ」

「ジュースのみたい」

「わたしはライスカレー」

小学五年の啓助は、彼なりに何かを感じとっているらしくずっと無口だった。

「啓助には何が起きているか教えておいた方が」と妻に耳打ちした。

敗戦のとき、樺太で事業を営んでいた誠吉の伯父一家が身一つで転がり込んできた。国境

を越えたソ連兵の略奪に遇い、一年近く森林地帯を逃げ回ったと言う。中風の後遺症で片足をひきずった伯父には、手広く商売をしていた頃の面影は無く、妻と子供二人は結核にかかっていた。酒好きであれほど快活だった伯父は無口になり、森林地帯の妻子を連れた逃避行がいかに悲惨なものであったか想像に難くなかった。実家に引き揚げても五人の家族を生かしていかなければいけない。伯父は不自由な足をひきずって農家を回り、にわとりのたまごを買い集めていわきに運び売りさばいた。帰りに浜の塩を買ってきて農家や商店に売った。結核の妻と乳飲み子は間もなく亡くなり、小児結核の男の子と伯父は、つてがあって茨城の炭鉱の町に移っていった。

それから一年も過ぎないで中風を再発した伯父は亡くなり、病弱の男の子は孤児になってしまった。

いとこに当たるこの少年を誠吉は引き取って、親とも兄ともつかず一緒に暮らしてきた年月があったが。

いま目の前で誠吉達にまつわりついている孫達を見ると、倒れる寸前で日本に帰国し、孤児になり誠吉に助けられたあの従弟の子供時代と見比べてしまう。日本の土を踏んだときは、幼稚園のマー君と一緒くらいの年齢だ。母親と死別したのはナツミくらいで、なにかしら不安を抱えて目の前に立っている啓助は、従弟が孤児になったときと同じくらいか。誠吉は引き取った従弟が四歳のころから中学を出るまでずーっと見ていたので、自分の孫達と比較し

てみると感慨ぶかいものがあふれてきた。とくに親切にというわけでもなかったが、牛飼いをしていたので牛乳は腹いっぱい飲ませたし、誠吉の母親もにわとりをひねっては生血を飲ませたりした。従弟の体力は徐々に回復していった。

何年前になるか、或るテレビプロダクションが日本の山村の取材に誠吉の村を訪れた事があった。三人ほどのスタッフが誠吉の家を宿にして、三日ほど滞在したのだが、酒の好きな連中で誠吉も付き合った。世界各地を巡っているのだが、特に東欧の話になると力が入っていたように思われた。社会主義体制下でも崩れず、脈々と受け継がれてきた民族の伝統伝承を数多く取材してきたクルーは、いま目前で出会ったようにそのときの事を新鮮に語った。

クルーの内のカメラマンのA氏は一人残り、チェルノブイリに立ち寄ったということを話し始めた。「チェルノブイリのその後」というテーマで、かれは独自の視点で廃惨の荒野を写し取ってきたと言うのだ。誠吉は時の経つのも忘れ、人類の犯した残酷な光景に思いをはせながら聞き入った。彼のカメラが捕らえた画面の中には、もちろん事故直後の騒然たる雰囲気など求むべきもないが、生物の生存を拒否し続けながら、静かに横たわる大地や、いまだ被爆後遺症から逃れられない人々の姿が静かに流れていると言うのだ。

「子供の体内に入り込み、心までもむしばんだ死の灰。許せませんね。あの少年どうしているか」

「霧が写ってましたよ」

突然彼が言った。
「霧の流れ道があるらしいんです。道一本へだてて人の住んでいない廃墟があり、向かい側では老人がゆっくり生活をしているというか」
「しかし廃墟のまわりに小さな畑がありましてね、青物が植えられていました。一人残った年寄りが行き来しているのかも知れません」
ヤマセが来るという言い伝えは聞いていたが、気象学的に誠吉達の耳に入り始めたのはごく最近の事だ。だがA氏のあのときの話を参考にすれば、今度の事故の場合、死の灰は太平洋に発生した冷たい霧にのって内陸部を目指し、羽附峠を越えようとしているのは確実なのだ。
天高山のふもと、羽附に最も近い所で農業をやっている友人がいる。ハウスの中でトルコ桔梗の栽培をしているのだが、昼飯のとき電話をしてみようかと思った。この友人にはチェルノブイリの話を聞いた直後会って話してみたが、
「誠吉さん、おれはそんなことで死んでもいいよ、ここらに若い人は誰も居なくなった。おれとばあさんで花作っているがいつまで出来るかわかんねえのさ」
「ただね、誠吉さん、そんなおっかない事しゃべって歩くと、今でも過疎だの限界集落だのと言われているここらからみな逃げ出してしまうぞ」と諌められたことがあった。いま電話したらどんな答えが返ってくるだろうと考えたが、あえて電話はしなかった。

もし、この事態をほんとに恐怖の実感として受け止めている人が居るとすれば、あの時茨城の研修に出かけた時の仲間達だろうか。あの時家に戻るとすぐ、何本もの電話がかかってきた。
「おっかなかったねえ。地図を広げてみたらすぐ近くだったんだもの。のん気に歌なんか歌ってさ」
「あの亡くなった人、おっかない薬をバケツで混ぜたり運んだりしてたんだって?」とためいきをついていた。
誠吉の隣り町からも原発に働きに行っている人が居るが、専門の知識と技術をもった正社員と出稼ぎの作業員と較べた場合、危機管理に対する認識はどうなるのだろうと疑いたくなる。
誠吉は問題が起こるたびこの事に強い疑問を感じていた。事故が見つかるたび、テレビの前で「申しわけありませんでした」と頭を下げる人と、現場で機器をみつめ構内を点検している人とのあまりにも大きな乖離に、この会社の低劣な体質をずーっと感じてきたのだ。
昼食をとるためにドライブインに入った。山岳道路に併設され、道の駅として人気の高い施設なので平日にもかかわらず立ち寄る車が多かった。食堂も混んでいた。
「おじいちゃんは席を取っておきなさい。マー君達はおじいちゃんと一緒に居なさい。啓助ナツミ食券を買うからね、こっちに来て」

妻はきびきびと指示して行列の後ろについた。誠吉に無い性質だった。周りを見渡したが六人一緒に座れる席はみつからなかった。

「どうしたの？」

「座れないよ、席がいっぱいなんだ」

「外で食べよう。東山がみえる所で、ね。マー君たち寒くないかえ？いまおばあちゃん上着を持ってくるからね」

昔は誠吉が命令し妻のユキが従っていたが、誠吉の病気を境に二人の間には微妙な逆転関係が見られるようになっていた。草は適当に伸びていた。腰を下ろすと下半身を柔らかく包んでくれた。

「気持ちいいよ」

「良かったね、うちの方も眺められるし。天玉そば頼んできた。てんぷら大きすぎるから半分もらうね」

「子供たちには何を頼んだ？」

「カレーとかいろいろ。分け合って食うから心配ない」

阿武隈の山なみはますます高く眺められた。左下に視線を向けると、まん中に山を抱いた福島の市街地が広がっていた。雲の影がゆっくり動いているように見えた。

「福島の辺りは風が西から吹いているようだぞ、大丈夫かもしれない」

「あらどうして分るの？」

「あの雲の流れだ。助かったな」

奥羽山脈に逃げ込めば助かるという口実を誠吉に持たせた理由は、車に乗ってひたすら走るということのほかに、阿武隈川の朝霧が死の灰を遮断する役をしてくれることを期待していた。

誠吉の村からは阿武隈川を見ることが出来ない。しかし朝方、高台に立って西の方を見る巨大な白大蛇が南から北に横たわっているのだ。それは川霧だ。霧の城壁が放射能をしっかり受け止め町の人々を守ってくれるに違いないと信じていたのだ。

「さあ車に乗って。出かけるぞ、あと三十分だよ」

隊列が走り出そうとした時携帯が鳴った。東京の妹からだった。

「どうしたのさ、何べん電話しても出ないからさ」

「大変な事になった。東山や天高山の回りの町村全部が避難地域になった。うちではすぐ飛び出してきて、いま昼飯を食った所だ」

「みんな一緒？」

「いや若い人たちは仕事の都合で残っている。さっき町の方を見たら、風向きが西から北に吹いているから大丈夫と思われるが」

「駄目よ、十一時に政府の発表があったわ。福島県の浜通りで危険度5、中通りで4よ、

それでこれからどこに行くつもりなの？」
「とりあえずトンネルの陰の（上の湯）に行こうかと思って来たんだ、いまトンネルまでちょっとのところなんだ」
「わかった、みんな気をつけてね、状況を見て私も行ってみるから」
車の中で誠吉はある男のことを思い出していた、バブル期の日本、都市は膨大な建設の槌音でわきかえり、農村からは大量の労働人口が送りこまれた。金になった。誠吉達出稼ぎに出なかった男達は、数多くの村役を押し付けられて走りまわった。一銭にもならなかった。
ある年の暮れ、誠吉は村役の慰労と称して温泉に一泊招待された事があった。酒の酔いも手伝って誠吉は同じ旅館にある居酒屋に入ってみた。座って水割りをなめていると、やはり近くの席で一人で飲んでいた男が銚子をもって誠吉の隣りにすり寄ってきた。
「どちらからお出でかね」
「〇〇村です」
「ああ俺達の村と近いね」
などとお互いを紹介するような形で話が始まった。
「おとうさんは何をやっておられる？」
「農家ですよ」
男の目に誠吉を軽蔑するようなものが見られた。

「農家だけでは大変だね。俺はいま人夫出しをやっている。三十人は使っているかな。今日も二人ばかり見つけて東京に連れていくんだが、まあ行く前に温泉で飲ましているわけよ。東京は景気いいよ」
誠吉は適当に相槌を打って当たり障りのない話を聞いていたが、酔いが回るにつれてその男はとんでもない事を語り始めた。
「まあ、俺はお前さん、人夫出しだがよ、人夫を集めるだけじゃないんだ。現場持ってるんだよ。親方が信頼してさ、仕事任せてくれるのだ、新幹線だよ、一日なんぼじゃないんだ、五十メーターとか一〇〇とか俺が請合うわけよ。日にちがきってあるからさ、今日みたいに人探しに来るわけ。良い時はそりゃ何百万にもなるさ、どうしても人手がなくて困るときもあるさ。そんな時は川崎の駅に行って立ちんぼを集めてくるが、力仕事に就いては出稼ぎの人にはかなわないて。新幹線の土盛りだろ。そこにくい打ちするのさ、十メーター三十本とかさ。とても打てないんだ。十五本で完了さ。それを半分打ちこんでのこぎりで切り落とす工法だね」
男の目が誠吉に迫ってきた。何故かその目の奥に復讐の炎がめらめら燃えているようだった。
「親方も監督も何とも言わないのかい。新幹線工事って一番やかましいんじゃないの、監督がつきっきりでさ」
「監督だろうが親方だろうが、俺達に文句など言えないさ。現場の事は俺達が一から十ま

でずーっとやってきたんだ。ひよっこのような大学出の監督になにも分りはしないね」

この男の口元をみながら誠吉は一言いってやりたいのを我慢して飲みこんだ。

「高架工事でセメントが足りなくなったとき、セメント袋を丸めてぶち込み分らないようにセメントを流し込んだんじゃないの」と。

あの男はいまどうしているか、おそらくは七十過ぎだろう。まさか都市への怨念からしっぺ返しをしたわけでもなかろう。男の村は天高山の東だ、毒の混じったヤマセが来るとすれば羽附より早い筈だ。

新幹線や原子力発電所、この巨大プロジェクトを完成させるため働いてきた人間、その人間が犯した罪、彼らにとってはほんに些細なごまかしとしか考えないで犯したであろう罪業を、どのように許せばよいのだろう。

誠吉の車は暗いトンネルに入った。トンネルでの思索の中で憂鬱な風が吹きつづけていた。

トンネルは果てることを忘れたかのごとく長く続いた。

やがて出口の小さな光が見えてきた。

二〇〇七年　七月記

追記

この空想散文の記述から五年後、誠吉は持病の手術のため大学病院の泌尿器科に入院していた。二〇一一年三月一一日、二時半過ぎ病棟の八階は大地震の恐怖に包まれていた。テレビ画面は大津波の襲来と原発基地の崩壊をヒステリックに報じつづける。点滴のため、ベッドから離れられない誠吉は終日それを見つづけた。三日後、浜の原発基地で放射能被災にあったひとびとが続々と大学病院に運ばれてきた。誠吉の妻が呼びだされ膀胱癌の手術が不可能な事を告げられた。病院から追い出された誠吉は迎えに着てくれた妻の軽自動車に乗って我が家に向かった。誠吉の村に近づくにつれて羽附峠を囲む羽山、天王山、移ケ岳といった山塊が神々の盾となって、放射能から彼の村を護ってくれているような感じがしてならなかった。

セシューム一三七

御先祖から守ってきた田圃だもの、氏神に捧げた後、又一年生かさしてもらいます。ハイ

羽附峠　三浦五郎作品集
二〇一六年十月二十一日　発行
著者　三浦　五郎
制作　歴史春秋出版株式会社
印刷　北日本印刷株式会社

著者略歴

三浦　五郎（みうら　ごろう）

昭和６年　４月５日　三浦家五男として出生
昭和19年　安達中学（旧制）入学
昭和25年　福島大学経済学部入学、祖母イネ没
22才　大学中退、長兄戦死、家業を継ぐ、父亀吉没
24才　遠藤春雄氏、安田寿男氏らと農青連加入
26才　佐久間由喜江と結婚
28才　安達酪農協理事、土地改良区理事等に就任
36才　町議会議員二期佐久間孝氏と岩代町文化団体、岩代町体育協会設立、由喜江32才勤務
38才　兄哲三の墓参のためロスアンゼルス訪問、妻同伴
42才　年なおし45
亀岡高夫私設秘書（安達郡担当17年）、母カネヨ没
45-47才　政治の時代
57才　1月脳出血、9月膀胱癌発見、現役引退
63才　ヨーロッパ旅行
平成13年　三浦画舫伝授美術館開設
65才　岩代町教育委員三期11年、プロバンスクラブ発足
妹トシ子バンドリ学校（都市と山村住民の合宿施設）開校
高木昌司氏と「屋根のない博物館報」発行
ミツイメモリーの丘にひまわり植樹、菜の花畑等景観デザイン
村の鍛冶や「岡部昭一郎伝承館」開設
いわしろ童謡唱歌を歌う会結成。山崎清典氏、斎藤隆博氏らと「森のコンサート」開始
吉田市良氏主催「木もれびトーク」に参加
75才　晴耕雨読、執筆活動に入る
平成19年　『羽附峠』執筆
平成23年　東北大津波、福島原発メルトダウン。福島医大81病棟にて体験（80才）

昭和33年　長女歌子誕生
34年　次女桃子
37年　長男研一
40年　三女美紀